〈解答〉

1

1　ア

2　そうらわず

3　ウ

4　エ

5　〔例〕深覚僧正が、届けていただいた食事のおかげで満腹になったことへの感謝の気持ち（を伝えようとしている。）（37字）

配点　各2点　10点満点

〈解説〉

1

「十訓抄」は、鎌倉時代中期に成立した、三巻からなる説話集。筆者（編者）は未詳。「可撰朋友事（朋友を撰ぶべき事）」や「可専思慮事（思慮を専らにすべき事）」などの十条の徳目を掲げ、各徳目ごとに例話となる説話を集めていることが、この書名の由来とされる。年少者の啓蒙を目的に、二百八十余りの教訓的な説話が収録されており、その後の教訓書の先駆的な書物と評されるものである。

1　本文の後半からわかるように、「法蔵の破れて侍るに、修理してたまはらん（＝寺の法蔵が破損しておりますので、修理していただきたい）」という深覚僧正の言葉の意図は、「腹が減ったので何か腹を満たすものをいただきたい」というものであった。しかし、その手紙を読んだ宇治殿（藤原頼通）が、その言葉通りに受け取ってしまい、法蔵の破損状況を調べるための使者を送ってきたため、手紙の意図を読み違えていることを、深覚僧正が非難したのである。

2　「ア段の音＋う」は「子音＋おう」と読む（例えば「まうす」は「もうす」と読む）という法則に従い、「さう」の部分を「そう」に改める。また、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、それぞれ「わ・い・う・え・お」に直す。

3　深覚僧正のもとに派遣した家司（＝使ひ）が、宇治殿のもとに帰ってきて、宇治殿に報告をしているのである。

4　「さもあるらむ」を直訳すると「さもあろう」となり、「きっとそうだろう」「もっともだ」という意味になる。

5　宇治殿が立派な料理を調えて深覚僧正に送ったところ、傍線部⑤のような返事が深覚僧正から届いたのである。このことから、食事を送り届けてくれたことへの深覚僧正の感謝が示されていると推察する。「法蔵の破れ」は「腹が減った状態」、「材木」は「料理」、「つくろひ侍る」は「満腹になったこと」のたとえとなっている。

〔大意〕

禅林寺の深覚僧正という人が、宇治殿（＝藤原頼通）に手紙をお送りになり、（その手紙で）「寺の法蔵が破損しておりますので、修理していただきたい」と申し上げなさっ

たので、（宇治殿は）自分に仕える家司（＝事務をつかさどる職員）にお命じになって、まず（寺の法蔵の）破損した様子を見るために派遣なさったところ、僧正がこのこと（＝宇治殿が法蔵の破損状態を見に、職員を派遣したこと）をお聞きになって、その使いの者（＝家司）を自分の前に呼び寄せて、「『どうしてこのように思慮分別がなくていらっしゃるのか。これでは天皇の補佐役をつとめなさることはできないでしょう』と（宇治殿に）申し上げよ」という伝言を託されたので、使いの者が帰り、（宇治殿の前に）参上して、「法蔵の破損している様子を、（深覚僧正が）お見せくださいませんでした。そのかわりに（深覚僧正は私を）お呼び寄せになって、『これこれということ（→深覚僧正の先ほどの伝言）を（宇治殿に）申し上げよ』ということでございました」と申し上げたので、宇治殿も不審に思っていらっしゃるところに、（宇治殿の）前に年老いた女房（＝女官）が控え申し上げていたのであるが、（その女房が）「ああ、それはきっと腹が減ったことを、『法蔵（の破れて侍る）』とおっしゃったのでしょう」と申し上げたので、（宇治殿も）「きっとそういう意味なのだろう」と思って、魚をおかずとした食事を立派に調えられて、（深覚僧正のもとに）お遣わしになったところ、「材木をいただきまして、法蔵の破損も修繕することができました（→立派な料理をいただきまして、おかげで空腹を満たすことができました）」と申し上げなさったということである。思慮深い人々というのは、このようなものである。